

古代の笛吹市

古墳時代から国府、国分寺の成立

華やかな縄文時代から時は流れて……

4500年前頃、地球の寒冷化とともに縄文文化はその華やかさを失い、土器などもより実用的な方向に進んでいきます。やがて稲作の浸透とともに弥生文化が花開き、身洗沢遺跡に代表されるような米の大生産地を持つ八代地域には甲斐を統括する勢力が出現します。

千年の都の幕開け……

八代町西部には広大な水田エリアが広がり、その豊かな生産力を背景に、4世紀後半に入ると甲斐の国の政治的、経済的中心地は中道町付近から八代町付近に移ってきます。甲斐を統括する勢力が岡・銚子塚古墳を築いたころから、武田信玄の父、信虎が躑躅ヶ崎に館を移すまでの約千年間、笛吹市エリアが甲斐の国の中心であり続けます。

甲斐国千年の都・・・

・岡・鉾子塚が造られた4世紀後半から武田信虎が館を躑躅ヶ崎に移した1510年代まで、笛吹市域は甲斐の国の政治的、宗教的中心地であり続けました。

・政治の中心

岡鉾子塚 ・ 竜塚 ・ 姥塚 ・ 国府 ・ 国衙

川田の武田氏館(信昌・信縄・信虎)

・宗教の中心

浅間神社、美和神社、国分寺、尼寺、寺本廃寺

古墳時代の笛吹市

・主な古墳＝岡銚子塚 ・ 竜塚 ・ 姥塚



岡・銚子塚（おかのちょうしづか）古墳

- 4世紀後半の前方後円墳。
- 全長105m、高さ7.5m。
- 笛吹市最大、県内4番目の大きさの古墳。
- 古墳のまわりに幅11mの溝がある。
- お墓の主は後円部にうめられている。
- 埴輪、鉄の剣、鉄の矢じりなどが出土した。
- 江戸時代に盗掘（とうくつ）され、鏡や剣、太刀などが持ち出された。
- 造られたときは白っぽい石で覆われていた。





被葬者は、支配した地域を見下ろし、眠る。人々は
支配者の墓を見上げて暮らす。



竜塚古墳(今は、芝生で覆い、整備されている。)



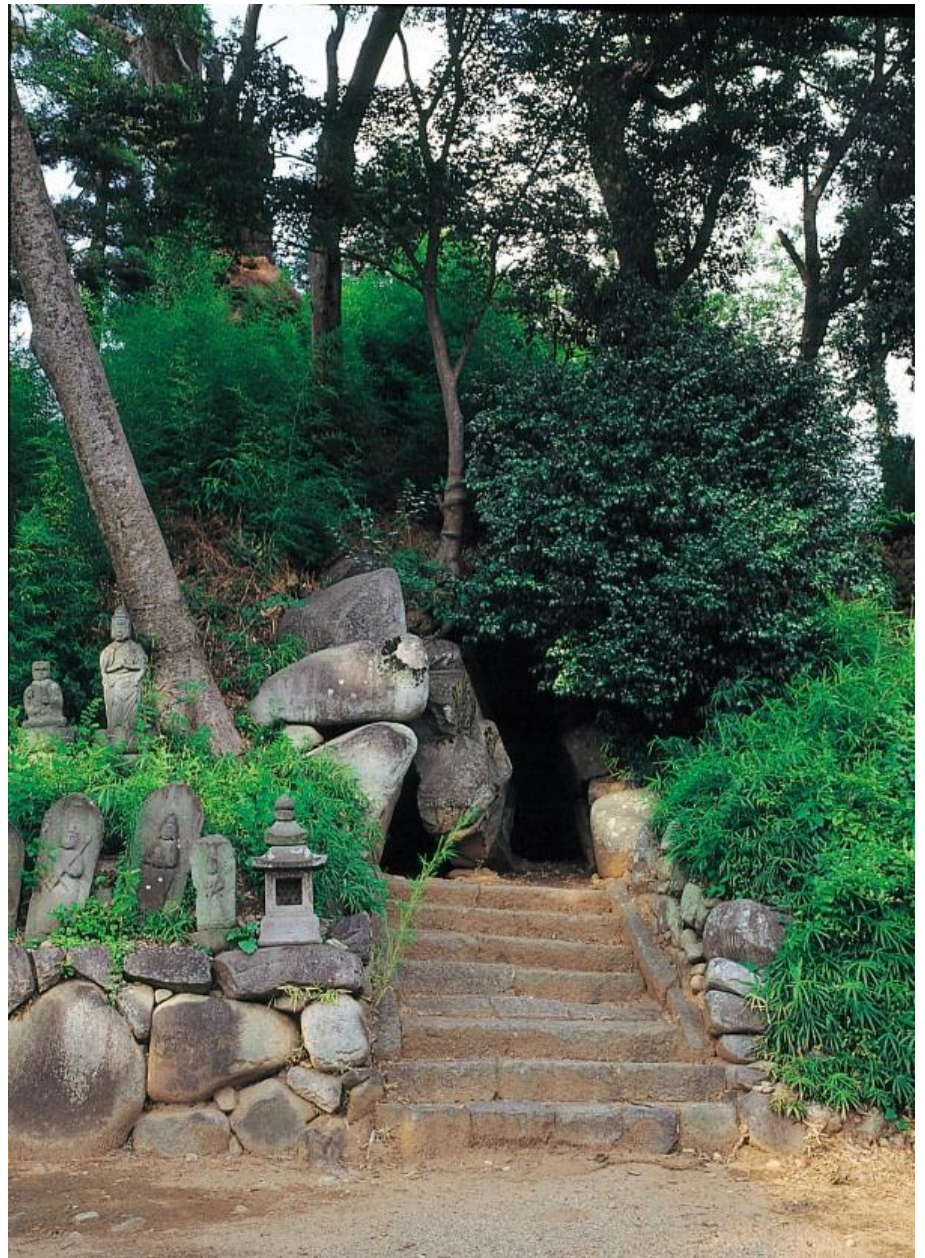
発掘調査で見つかった竜塚古墳の表面を覆う白い石



石室(遺体を納める部屋)を造る石積みの様子

姥塚古墳

- ・6世紀後半の横穴式石室（せきしつ）を持つ古墳。
- ・遺体を納める部屋を巨大な石で造っている。
- ・直径約40m、周囲に幅約10mの溝がある。
- ・東日本最大の横穴式石室の古墳。



今は、台風被害防止のため木を切ってある。

八代町の古墳

- ・団栗塚(ずんぐりづか)古墳＝北地区 帆立貝式
5世紀後半、前方部は削平された。
直径18mの後円部が残る。
埋葬施設が二つ並び、内部は朱塗りされている。
直刀、玉類、鏡(菱雲文帯半円方形四乳鏡)
- ・狐塚古墳
5世紀後半の帆立貝式古墳。全長42m。
鉄剣等が出土。埴輪片が出土。
- ・地蔵塚古墳
八代町南の八代ふれあいセンター付近の円墳。
- ・その他、熊野神社付近、竹居の浅川沿いなどに
横穴式石室の古墳群がある。



狐塚古墳

御坂町の古墳

- 亀甲塚(かめのこうづか)＝御坂町成田
直径25mの円墳状に見えるがかつては帆立貝式古墳の可能性あり。
- 長田古墳群(ちょうたこふんぐん)
横穴式石室の円墳が36基以上密集している。
6世紀後半から7世紀前半の古墳群。
東日本には稀なT字型石室を持つ古墳もあった。
- 錦生古墳群
姥塚周辺以東に多くの古墳が残る。陶棺が出土。
- 蝙蝠塚古墳
下野原農免道路沿いに20基前後の古墳が残る。



錦生古墳群 姥塚東の古墳

一宮町の古墳

- ・千米寺(せんべいじ)・石(いし)古墳群
- ・楽音寺(がくおんじ)古墳群＝塩田
- ・国分古墳群
- ・四ツ塚古墳群
- ・経塚古墳(八角形墳)

石和町の古墳

- ・寺の前古墳群＝大蔵経寺前
- ・積石塚群



経塚古墳(八角形墳)

春日居町の古墳

- 保雲寺古墳群

寺の前古墳より仏具の「銅碗」出土

- 積石塚群（笹原塚3号墳など）

- 平林2号墳

金銅製の装身具や馬具が多数出土

- 狐塚古墳

- 天神塚古墳



平林2号墳復元風景

八代地域の政治的、文化的反映の背景には、若彦路の存在が大きく影響しています。中央の先進技術や文化、思想は中道往還、若彦路、御坂路の3つのルートによって甲斐に入ってきました。最も古いルートが中道往還といわれ、その影響で中道町には甲斐の国でも古い古墳が集中しています。若彦路の整備が進むと人々の流れは若彦路に移り、甲斐の入口にあたる岡地域が甲斐の政治、文化をリードすることになったのでしょう。その後、御坂路が整備され、国府、国分寺の時代に入ります。

☆律令体制下の地方支配

●地方の行政組織

60ヶ所以上の国

四畿(716年から五畿)七道の行政単位(甲斐は七道の一つ東海道)

●国一郡一郷制

全ての権限を中央に集中(中央集権的体制)

中央から派遣された国司が統治

地方に出先機関(国府)を設置(国司の拠点)

国の下に郡(評)、その下に郡(里)

郡の行政機関が郡家(ぐうけ)

●官道

中央と地方を結ぶ道路網の整備(防衛目的)

都と地方を7本の幹線道路(七道)で結ぶ

幅員12m前後の大規模な直線道路

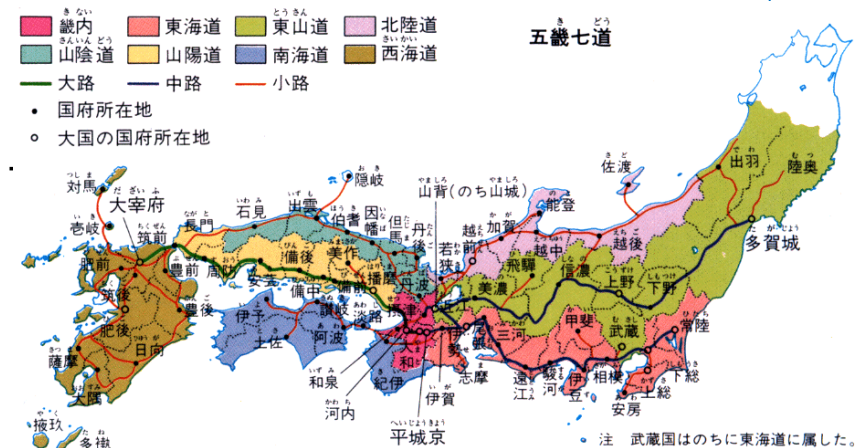
大路・中路・小路、30里(約16km)ごとに駅家(うまや)

●国司と郡司

国司・・・国から任命されて地方に派遣された役人→任期制

郡司・・・伝統的な支配権をもつ地方豪族が任命された地方官→終身

大領・少領・主政・主帳の四等官



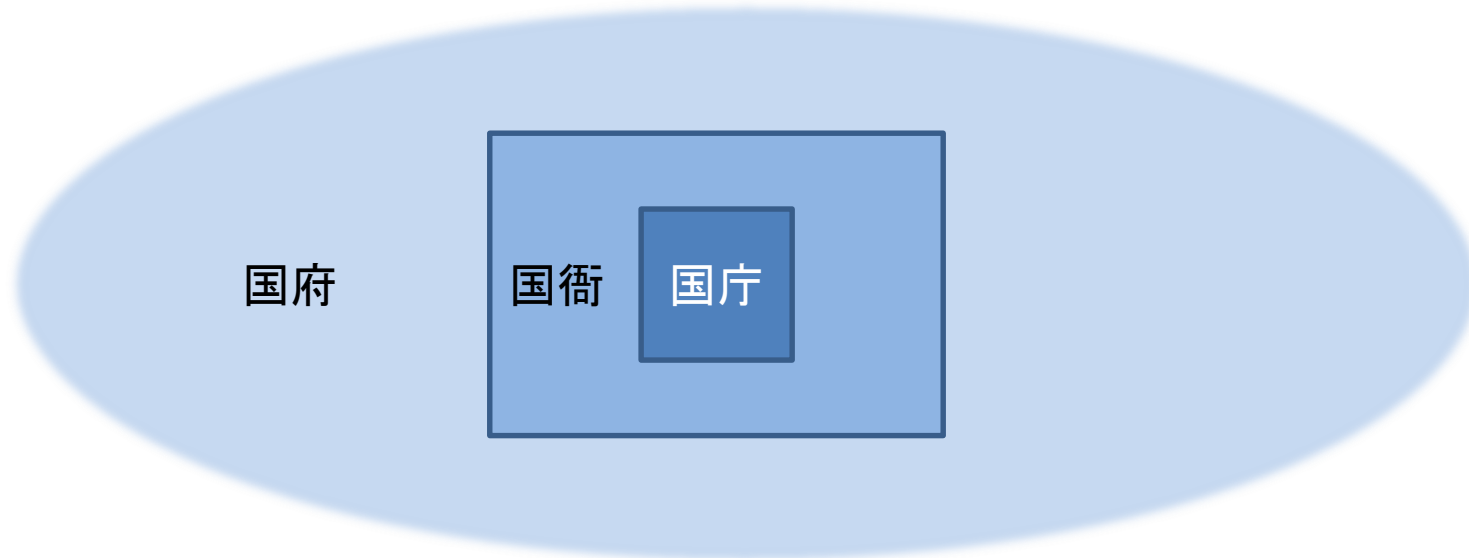
☆国府の構造

国庁 国司らが政務や儀式を執行する中枢部

国衙 国庁を中心にした附属施設(曹司)群

※10～12世紀の王朝国家の地方統治機構という意味もあります。

国府 国衙を含めて、国司館や国衙に勤務する役人の居住域を含む一定の地域



☆甲斐の国府について

『和名類聚抄』:「国府在八代郡」

国府の推定地

A: 春日居町国府

B: 御坂町国衙

C: 一宮町国分

国府移転説

- ① 国府から国衙へ移転
- ② 国衙から国府へ移転
- ③ 国府→国分→国衙へ移転
- ④ 国衙→国分→国府へ移転



古代甲斐国（今の山梨県）の地図

☆春日居町国府地区の様相



☆御坂町国衙地区の様相



☆甲斐国府跡(国衙跡)についてまとめ

春日居町国府地区では

- ①池ノ尻地区で礎石建による正倉建物
- ②狐塚地区では7世紀末から8世紀始めと考えられる大形掘立建物が確認されている。

いずれも郡家に関連する遺構の可能性が高く、国衙の所在を裏付けることはできない。

御坂町国衙地区では

- ①大形掘立柱建物や区画施設など官衙の存在を裏付ける遺構は確認されていない。
- ②伝承地区内では瓦がまったく出土していない。

平川 南 先生の考え

- ①『和名抄』は承平年間(931～938)の成立で、記載は9世紀代の状況を反映。
- ②貞観6年(864)、富士山が大噴火を起こし、八代郡(富士北麓)は壊滅的被害を受けた。
- ③『和名抄』の記載は富士北麓にあった郷が壊滅している状態を示している。
- ④甲斐国府(衙)は富士山監視強化のため一時的に八代郡(御坂町国衙)へ移転し、鎮静後山梨郡に戻った。

☆国府(衙)が八代郡に移転した9世紀後半は国庁建物の衰退期にあたり、瓦葺の建物が造られなかった可能性はある。

☆国分寺建立の詔①

「私は徳の薄い身であるのに、おそれ多くも天皇という重い任務を受けている。しかし、民を導く良い政治を広めることができず、寝ても目覚めても恥ずかしい気持ちでいっぱいだ。昔の賢い君主は、みな祖先の仕事をよく受け継ぎ、国家はおだやかで無事であり、人々は楽しみ、災害は無く幸福に満ちていた。どうすれば、そのような政治ができるのであろうか？この数年は、凶作が続き伝染病が流行している。私は恥ずかしさと恐ろしさで自分を責めている。

そこで、万民のために大きな幸福を求めたい。以前、各地の神社を修造させたり、諸国に丈六の釈迦牟尼仏一体を造らせるとともに、大般若経を写経させたのもそのためである。おかげで、今年は春から秋の収穫の時期まで風雨が順調で五穀も豊かに稔った。これは、誠の心が伝わったため、神霊のたまわりものである。その靈験はまったくすごいものだ。

(1) 聖武天皇が自分の政治を反省し、どうすれば、人々を幸福にすることができるか案じている部分。

(2) これまでに仏教の力で成功したことを振り返っている部分

国分寺建立に至るまでの経緯

① 天平9年(737)3月3日

- ・丈六釈迦三尊像の造立
- ・大般若経一部600巻の写経

② 同年8月2日

- ・月に2～3度の最勝王経の転読
- ・六斎日の殺生の禁断

③ 同年8月15日

- ・全国で578人の僧を得度させる。

④ 天平12年(740)6月19日

- ・法華経10部の写経
- ・七重塔の建立

⑤ 同年9月15日

- (藤原広嗣の乱鎮定のため)
- ・七尺の観世音菩薩像の造立
- ・観世音経10部の写経

☆国分寺建立の詔②

金光明最勝王經には『もし広く世間でこの經を読み、敬い供養し、広めれば、われら四天王は常に来てその国を守り、一切の災いもみな取り除き、心中に抱くもの悲しい思いや疫病もまた消し去る。そしてすべての願いをかなえ、喜びに満ちた生活を約束しよう』とある。

そこで、諸国にそれぞれ七重塔一基を敬って造り、併せて金光明最勝王經と妙法蓮華經を各十部ずつ写經させることとする。私もまた、金文字で金光明最勝王經を写經し、塔ごとに一部ずつ納めたいと思う。これにより、仏教の教えが大空・大地とともにいつも盛んに続き、仏のご加護が現世でも来世でも常に満ちることを願う。

七重塔を持つ寺は「国の華」であり、必ずよい場所を選んでまことに長く久しく保つようにしなければならない。人家に近く悪臭が漂うような所ではよろしくないし、遠い所で集まる人々を疲れさせてしまうようでは望ましくない。国司達は寺を莊嚴に飾り、いつも清潔に保つように努めなさい。間近で仏教を擁護する神々を感嘆させて、神仏が進んでこの国を守護してくださるようになって欲しいのだ。」

(3) 金光明最勝王經の功德を説明。

(4) 諸国に七重塔の建立と金光明最勝王經と法華經の写經を命じ、自らも金光明最勝王經を写經して諸国の七重塔に納めることを願う。

(5) 七重塔を持つ寺は「国の華」であるので、選地の条件を示し、莊嚴かつ清潔に保つよう国司に命じる。

☆国分寺建立の詔③

国ごとの僧寺には、寺の財源として封戸を五十戸、水田十町を施し、尼寺には水田十町を施しなさい。

僧寺には必ず二十人の僧を住まわせ、その寺の名は**金光明四天王護国之寺**としなさい。また、**尼寺には十人の尼を住まわせ、その寺の名は法華滅罪之寺**としなさい。二つの寺は距離を置いて建て、僧尼は教戒を受けるようにしなさい。もし僧尼に欠員が出たときは、直ちに補充しなさい。毎月八日には、必ず最勝王経を転読し、月の半ばには**戒(かい)**と**羯磨(かつま)**を唱えなさい。

毎月の六斎日には、魚とりや狩りをして殺生をしてはならない。国司は常に監督を行いなさい。

(6)僧寺・尼寺の財源確保
ここで初めて僧寺・尼寺があることがわかる

(7)
・僧寺・尼寺の定数と名称
・最勝王経の転読(天平9年8月2日)
・戒(僧尼の規則)と羯磨(儀式の作法)の唱和

(8)六斎日の殺生禁断
(天平9年8月2日)

☆全国の国分寺一覧②

送途中に処刑された。

6 国分寺・国分尼寺の分布

▶解説 国分寺の建立

国分寺・国分尼寺の建立はかならずしも順調には進まず、政府は国司の怠慢を叱咤し、郡司に協力を求める詔も出された。それでも、道鏡政権の頃までには、おおよそ完成したらしい。国分寺は国府近くに建立され、現在も遺跡をとどめる。



国分寺とは

天平13年(741)の聖武天皇の詔勅

全国66力国の国分寺
壹岐・対馬・(多櫛)の島分寺

国分僧寺と国分尼寺の二寺制
丈六の釈迦如来と阿弥陀如来を安置

七重塔は天皇の権威の象徴
「金字金光明最勝王經」が納められる

国分寺は王権擁護の寺

全国に建立を徹底した仏教政策



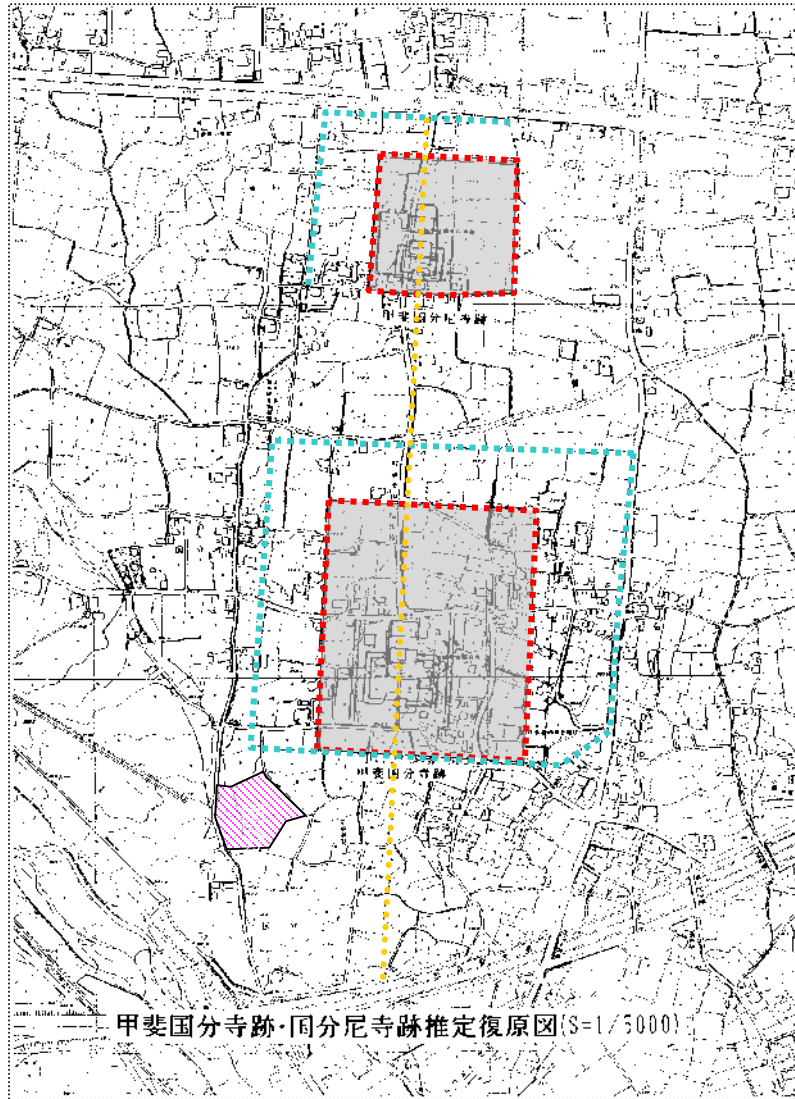
国分寺「銘墨書土器」(松原遺跡出土)

国家の安寧を目的とした法会が各国国分寺で一斉に執行

日本の律令国家の目指す仏教国土化の実現

国分寺制度

☆甲斐の国分寺・国分尼寺



僧寺と尼寺は約450mの距離を置き南北直列に配置

☆甲斐国分寺跡

南北330m、東西220mの
範囲を築地塀で囲み、南西
部分に主要な伽藍建物が
配置される。



軒丸瓦



鬼面門鬼瓦



軒平瓦



「金寺」銘墨書土器



☆甲斐国分寺跡の発掘



・伽藍配置・・・中軸上に南門、中門、金堂、講堂が並び、中門から派生した回廊は金堂の南東に配置された塔を囲み、金堂に取り付く大官大寺式

・金堂、講堂の周囲に石敷きがあり、回廊の周りは礫が敷詰められている。

・石敷きがこれだけ良好に残っている国分寺は全国的にも無い。



☆塔跡の発掘調査



甲斐国分寺塔跡東階段

- ・四天柱と西側柱の礎石3個が欠損するが、心礎をはじめ残りの礎石は元位置を保つ。
- ・北辺を除く3辺の基壇周りを確認、河原石積の外装。
- ・基壇の平面規模は1辺16.9m(57尺)。基壇端から更に0.4m外側に延石列が廻る。
- ・幅3.9m(13尺)の東階段を3段分検出。基壇縁から1.5m(5尺)張出す。
- ・柱間は1辺9.8m(33尺)、11尺等間
- ・軒の出は12尺
- ・旧地表面から塔心礎上面まで1m



☆金堂跡の発掘調査①



甲斐国分寺・金堂跡 推定復元



- ・金堂跡には礎石が元位置を保つものがないため、建物規模は不明
- ・正面階段幅(10.8m)は中央3間に対応か？
- ・桁行7間か9間、梁間4間と推定
- ・正面及び背面で石敷きを確認

☆金堂跡の発掘調査②



正面階段
及び敷石



背面敷石



基壇の規模
東西41～42m(137
～140尺)
南北22.6m(75尺)
掘込地業
基壇外装は河原石
積
中央間3間に対応す
るように幅10.8mの
正面階段1基

正面敷石

☆西面回廊跡の発掘調査



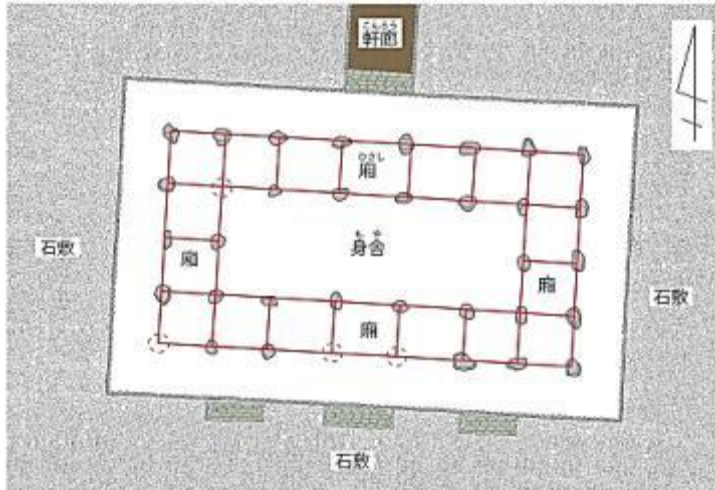
- ・金堂側面中央に取り付く
- ・回廊北西隅を確認
- ・東西回廊幅7.8m(26尺)、
南北回廊幅7.4m(25尺)
- ・基壇は掘込地業
- ・周囲はこぶし大の礫が敷詰められる。



☆講堂跡の発掘調査



全景



平面模式図

※北側の階段、軒窓、正面以外の石敷については、発掘調査を実施していないため推測です。

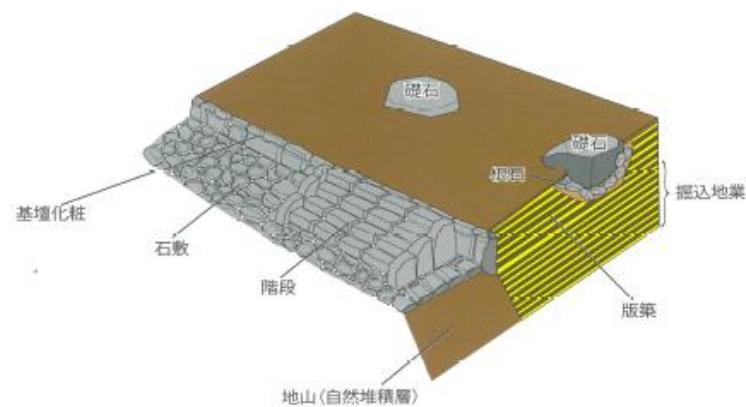


- ・礎石32個が元位置を保つ。
 - ・建物規模は桁行26.4m(88尺)、梁間13.66m(45.5尺)、7間4間の四面廂建物
 - ・基壇規模は東西32.4m(108尺)、南北19.66m(65.5尺)
 - ・基壇は掘込地業
- 基壇外装は金堂と異なり、河原石広口の扁平な面を立て並べ、正面を意識。
- ・正面階段は4段で、幅4.2m(14尺)の中央階段、幅3.6m(12尺)の両脇階段の3基と推定(左階段は欠損)
 - 各中央間1間、左右1間の柱間に対応する。
 - ・正面石敷きは金堂に連なる。
 - ・背面中央に階段が付くと推定

☆講堂跡正面



正面階段及び敷石



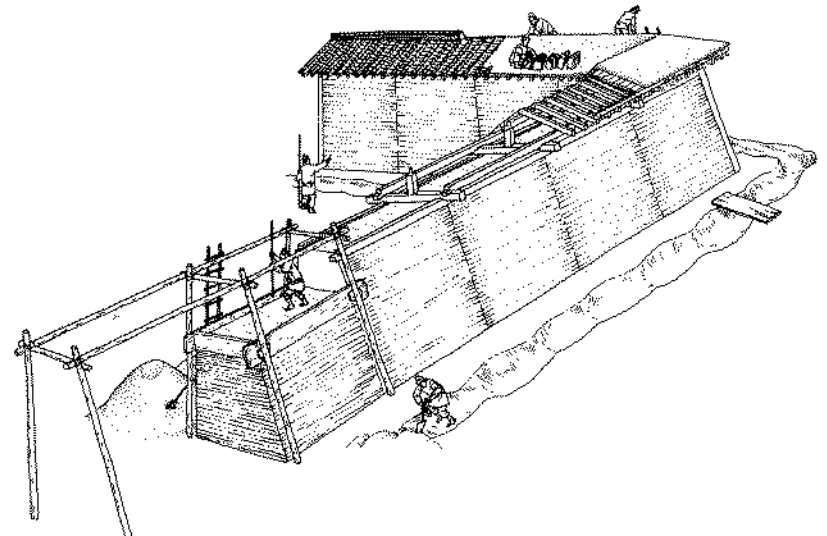
正面階段模式図

☆築地塀の調査

甲斐国分寺跡の北西部分で確認。

土を突き固めながら積み上げ、瓦屋根で保護した土塀。

国分寺の周囲を囲っていたものと考えられる。



☆甲斐国分尼寺跡

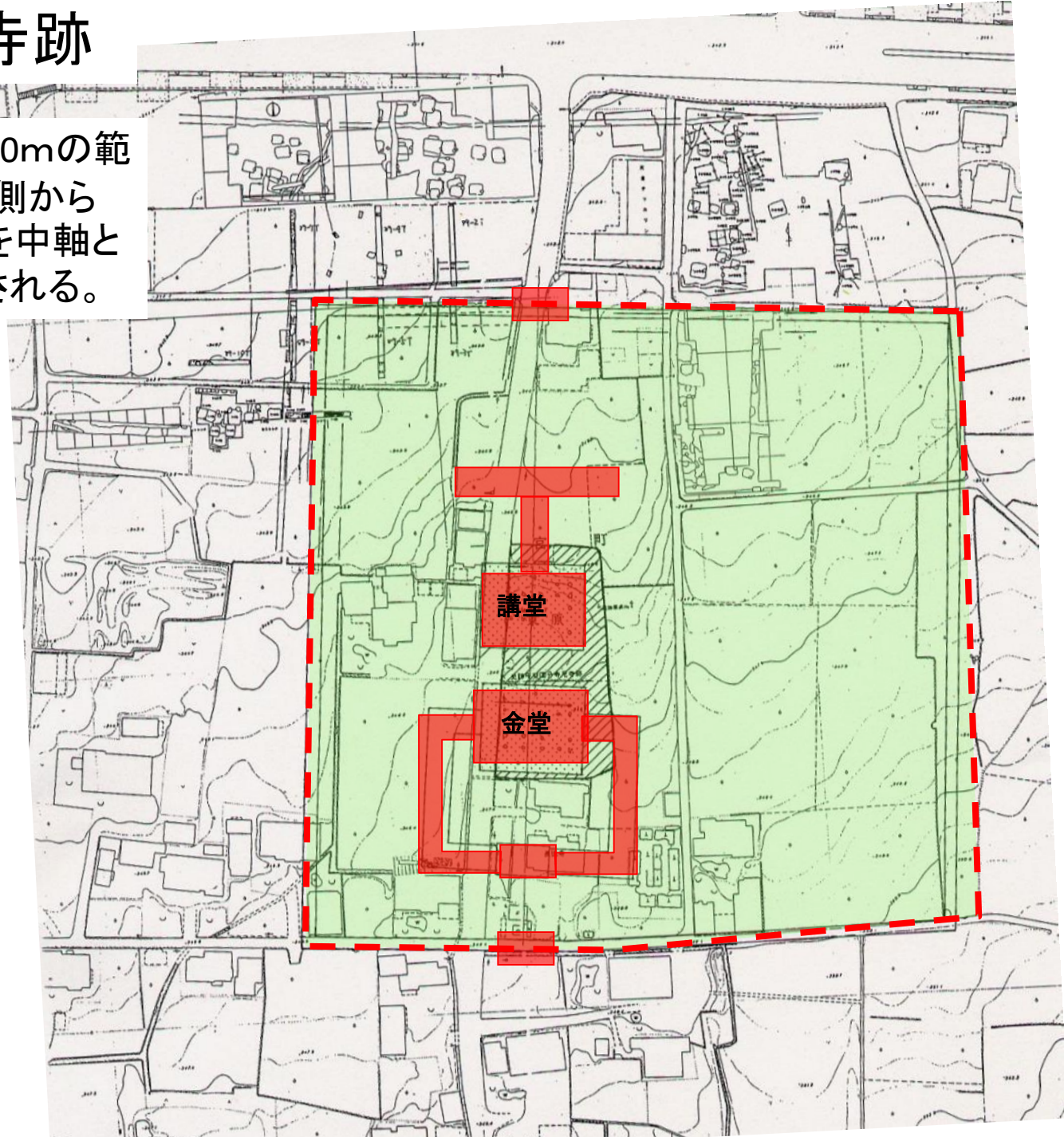
東西・南北ともに約180mの範囲を築地塀で囲み、西側から60m(全体の1/3)の線を中軸として金堂・講堂が配置される。



「法寺」銘墨書土器



「大伴」銘墨書土器



☆国分尼寺金堂跡

桁行5間(約21m)、梁間4間(約13.3m)に復元される。



☆国分尼寺講堂跡

桁行5間(約21m)、梁間4間(約14m)に復元される。



☆国分尼寺跡 北辺部の調査

甲斐国分尼寺跡の築地塀北側から多くの竪穴住居跡群が見つかった。

竪穴住居跡からは「法寺」と書かれた墨書土器が多数見つかり、尼寺の造営に関連した人々居住地であったと推定されている。

竪穴住居跡は8世紀中頃
に出現し、10世紀中頃に消滅する。



築地塀調査状況